（　電子メール施行　）
農技 第　　1505　号
平成 28 年 12 月 12 日

各関係機関長　様

兵庫県病害虫防除所長

病害虫発生予察防除情報　第５号を下記のとおり発表します。
タマネギ苗床でべと病が発生していますので、防除の徹底につきましてご指導願います。

---

平成 28 年度　病害虫発生予察防除情報　第５号
タマネギべと病の防除対策について

**１　対象病害虫名**　　べと病

**２　対象作物**　　タマネギ

**３　発表の根拠**

(1) 11 月上旬～12 月上旬に早生～晩生品種の現地苗床で合計 106 苗床を調査した結果、12 月上旬にべと病の発生が確認された。発生苗床率は 1.9%、平均発生苗率は 0.0７%であった。平年は発生が認められないので、やや多い発生である。

(2) 大阪管区気象台の 12 月 8 日付 1 か月予報によると、向こう 1 か月の近畿地方の平均気温は平年並の確率 40%である。しかし、降水量が日本海側で多い確率 40%、太平洋側で平年並または多い確率ともに 40%と予想されており、べと病の発生にやや助長的である。

**４　本病の病徴**

(1) 苗での病徴について、葉色の緑色がやや薄くなり淡黄色を呈する。降雨後など湿度が高い条件では灰色の分生胞子を形成する。葉が湾曲することがある(写真 1)。また、写真 2 のように葉色が緑色のままで分生胞子を形成することもある。症状が進むと葉色の淡黄色部分は灰白色に変化する(写真 3)。

(2) 定植後の本田での初期病徴について、葉が大きく湾曲し、葉色がやや薄く淡黄色になり、湾曲した部分を中心に、降雨後など湿度が高い条件では、灰色の分生胞子を形成する(写真 4)。

**５　防除対策について**

(1) 苗床では症状が見にくいことがあるので、注意深く観察し、発病株が見られた場合は早急に抜き取り、袋などに入れて処分し、直ちに薬剤散布する。
　発病が見られない場合も、定植前日に苗床で**必ず**薬剤防除し、定植時には注意深く苗を選別すること。

(2) 定植後のほ場も頻繁に観察し、発病株が見られた場合は早急に抜き取り、処分し、薬剤防除すること。
　発病が見られない場合も定植後20～30日後に**必ず**薬剤散布を行う。その後も継続的な薬剤散布を行う。

(3) 防除薬剤については、兵庫県農薬情報システムを参考に選定し、農薬使用基準を遵守すること。同

一系統の薬剤を連続使用しないようにし、他の系統薬剤とのローテーション散布を心がけること。特に、ＱｏＩ剤*については耐性菌リスクの観点から、苗床での使用は1回にとどめること。

兵庫県農薬情報システム　(http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo)

(4) タマネギのべと病菌はネギにも感染する。葉に形成された胞子は風雨で広域に伝染する。12 月 1 日付の防除情報第 4 号で示したように、11 月下旬にネギでもべと病の発生を確認している。ネギにおいても頻繁にほ場を観察し、防除を徹底する。ネギとタマネギでは登録農薬が異なる場合や、同じ剤でも使用時期などの登録条件が異なるので、使用に際しては十分留意する。

＊：ＱｏＩ剤：病原菌の呼吸をつかさどる器官に作用する殺菌剤の一種。アゾキシストロビン（商品名：アミスター）、ピラクロストロビン(シグナム)、フェンアミドン(レイデン)、ピコキシストロビン(メジャー)、ファモキサドン(ホライズン)、クレソキシムメチル（ストロビー）、ピリベンカルブ（ファンタジスタ）などがこのグループに属し、タマネギに登録がある。

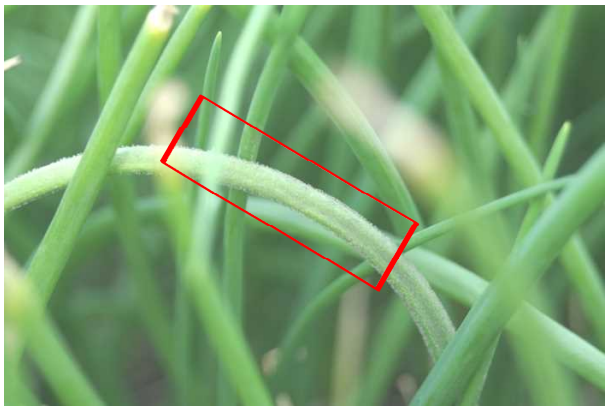

写真１　苗でのべと病の症状(平成 21 年 11 月下旬撮影)
葉色がややうすく、灰色の分生胞子を形成している。葉が湾曲することがある。(枠内)

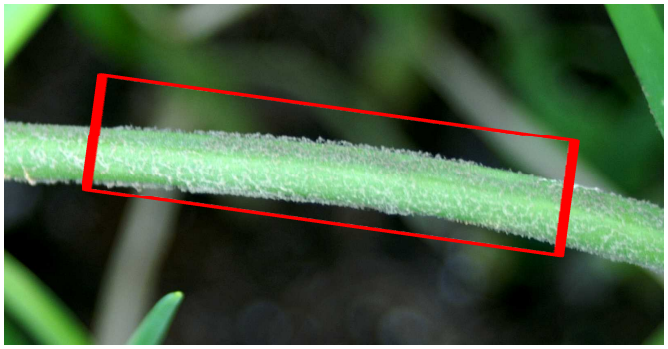

写真２　苗での分生胞子の形成(28 年 12 月 5 日撮影)
葉色は緑色のままで分生胞子を形成している(枠内)

写真3　苗での灰白色の病斑(28年12月5日撮影)

写真４　定植後の本田でのべと病越年罹病株の症状(極早生品種、28 年 1 月下旬撮影)
葉が大きく湾曲し、葉色がややうすく、高湿度条件で灰色の分生胞子を形成する。周囲の株に比べ草丈が低い。

問い合わせ先　兵庫県病害虫防除所　０７９０－４７－１２２２
http://hyogo-nourinsuisangc.jp/chuo/bojo/index.htm